

Title	Decision Making by Families and Allocation of Indivisible Objects
Author(s)	暮石, 涉
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49068
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	くれいし わたる 暮石 渉
博士の専攻分野の名称	博士（経済学）
学位記番号	第 21726 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 経済学研究科経済理論専攻
学位論文名	Decision Making by Families and Allocation of Indivisible Objects (家族の意思決定と分割不可能財の配分)
論文審査委員	(主査) 教授 西條 辰義 (副査) 教授 ホリオカ、チャールズ・ユウジ 准教授 佐々木 勝

論文内容の要旨

本論文では、理論および実証の両面から家族の行動の決定要因に焦点を当て分析を行った。

第 1 章では、出産のタイミングが扶養控除によって影響を受けるかどうかを分析している。税制における扶養控除は、親に 1 月ではなく 12 月に赤ちゃんを産むと得するように設計されている。親ができちゃった結婚をしたかどうか注目し分析した結果、扶養控除が 1 万円高くなると、できちゃった結婚をしていない親の 1 月生まれに対する 12 月生まれの子どもの割合は 3.8 パーセント・ポイント高くなることがわかった。

第 2 章では、親による成人した子どもの子育ての援助を考慮に入れ、複数のきょうだいによる戦略的な居住地選択を扱っている。新たに構築した 3 段階ゲームでは、第 1 子が親と同居するもしくは親の近くに住み、第 2 子は親から離れて住むというサブゲーム完全均衡を得た。また、この理論結果は、日本のマイクロデータを用いた推定からもサポートされた。この結果から、親からの子育て援助はきょうだいの居住地選択の決定要因の一つであることが実証的に示されたということが出来る。

第 3 章では、日本のマイクロデータを用い、親が子どもの性別に対してどのような選好を持っているのかを分析している。具体的には、子どもの数を一定とした上で、男の子の数が少ないほど次の子を生みやすいかどうかを見ることで、親が男子選好を持っているかどうかを判断しようとしている。本章の推定では、戦前生まれの親は男子選好を持っていたが、戦後生まれの親では男子選好から混合選好へ移っていることが示された。また、戦後生まれの中でも最近のコホートでは、夫が長男、婿養子また田舎に住んでいる場合、女子選好を持っていることが示された。

第 4 章では、個人の移住決定と都市で感染症にかかるリスクとの間の相互作用を明示的に組み入れたハリス・トドロ型の移住モデルを構築している。このモデルから、都市の健康インフラストラクチャを改善することを目的とする補助金を導入したとしても、社会的厚生水準を上昇できないケースがありうるという結果を得ている。

第 5 章では、シングルピークな効用関数を持つ個人に複数の分割不可能財を配分する問題を考えている。公平性に関する新たな性質 *equal probability for the best* を導入し、*randomized uniform rule* と呼ばれる配分ルールが *equal probability for the best*、戦略的操作不可能性、そしてパレート効率性を満たす唯一の配分ルールであることを示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、理論および実証の両面から出産のタイミング、親子間の同居・援助行動、出産行動（男子選好）、感染症が流行っている場合の移住行動、分割不可能財間の配分問題など様々な家族・個人の行動の決定要因に焦点を当てた大変独創的かつ綿密な研究であり、博士（経済学）として充分価値があると判断するものである。